

博 多 81

－ 博多遺跡群第100次調査の概要 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第707集



2 0 0 2

福岡市教育委員会

序

福岡市博多区の北側、JR博多駅から博多港にかけての都心部は、かつて東アジア、とりわけ中国・朝鮮との貿易で繁栄した、中世都市「博多」の故地にあたります。現在でも中世以来の神社・仏閣が点在し、かつての都市の姿を偲ばせてくれています。また、その地下には、「博多」の遺跡が眠っています。

しかし、残念なことには、現在の都心部にあたるため、種々の開発行為による遺跡破壊は避けられません。福岡市教育委員会では、昭和57年以降、必要に応じて発掘調査を実施して、これに対応してまいりました。本書は、その第100次調査の成果を報告するものです。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご協力をいただいた株式会社白水社をはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成十四年三月二十九日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　　言

1. 本章は、社屋兼専用住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、博多遺跡群第100次調査（福岡市博多区中呉服町2-18）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭が作成し、森若知子が墨書きした。
4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・大庭康時が作成し、森本・井上涼子が製図した。出土銭は、大庭智子が踏定とし、判読した。
6. 遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 遺物・記録類の整理には、今井民代・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵があたった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9647		遺跡略号	HKT-100	
調査地地番	博多区中呉服町2-18		分布地図番号	千代博多 48	
開発面積	400m ²	調査対象面積	180m ²	調査実施面積	180m ²
調査期間	1996年10月23日～11月26日				

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

平成8年3月21日、株式会社白水社取締役社長白水康信氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区中呉服町2番18号に関する埋蔵文化財事前審査願いが提出された。

申請地は、わが国を代表する中世貿易都市遺跡である博多遺跡群の中に位置し、周辺でも発掘調査が行われてきた地点にあたった。

申請を受けた埋蔵文化財課では、ただちに試掘による確認調査が必要であると判断、申請者にその様を伝えた。

確認調査は、申請地の既存建築物解体を待って、同年10月4日に実施した。その結果、礎石は極めて少なく、現地表下2.5~3.7mで遺構が存在することが確認された。

開発用途は、専用住宅部分を含んだ社屋の建設であったが、申請者は博多で古くからの葬祭場を営んでおり、社屋の建築にあたっては、地下の埋蔵文化財への影響は回避できなかった。そういう状況下、申請者と埋蔵文化財課では、発掘調査に向けての協議を重ねることとなった。

協議は、費用負担の多寡を巡って回数を重ねることとなった。社屋建設とはいえ、申請者は地場の商人で、個人のいわば零細経営である。申請者からは、費用負担の軽減が強く求められ、最終的には、発掘調査費の一部、すなわち専用住宅部分に該当する割合で補助金を以て、さらに残土の一部搬出と発掘調査事務所・光熱水費の現物提供などで費用負担を軽減、また整理・報告に関わる費用に補助金を充てることで、合意を見た。なお、この協議の過程で、発掘調査対象面積は、建築面積である400平方メートルから、敷地境界から安全のため5mの引きを取った180平方メートルに減り、費用負担面から矢板打ち込みも行われないこととなった。こう言った絞り込みを経て、発掘調査期間は一か月となり、平成8年10月23日発掘調査に着手、同11月26日終了した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	株式会社白水社	取締役社長	白水康信
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田 英俊（調査当時） 生田 征生（現任）
調査総括	同 埋蔵文化財課	課長	荒巻 輝勝（調査当時） 山崎 純男（現任）
	同	第二係長	山口 謙治（調査当時） 力武 卓治（現任）
調査庶務	同	第一係 文化財整備課 管理係	内野 保基（調査当時） 御手洗 清（現任）
調査担当	同 埋蔵文化財課	第二係 大庭 康時・本田浩二郎	
調査作業	石川君子 井口正愛 江越初代 大久保五枝 大久保学 大庭智子 渋村和憲 清水明 関加代子 関義種 曾根崎昭子 都野浩之 永隈和代 長田嘉造 能丸勢津子 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 吉田清		

3. 調査地点の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄海灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開墾された石堂川（御笠川）、南は石堂川開墾以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画される。

本書では、紙数の制約から博多遺跡群の考古学的・歴史的環境について述べる余裕がないので、それに関しては福岡市教育委員会刊行の博多遺跡群関係の他の報告書をご参照願いたい。ここでは、本調査地点に関わる地形的・歴史的な要点をあげ、今回の発掘調査に関する課題を提示するにとどめる。

博多遺跡群の立地する砂丘は、大きくは内陸側の仮称博多浜と海側の「息浜」とに大別される。両者は自然地形上からだけではなく、歴史的にも古代以来の町場である博多浜と鎌倉時代以降の新地である「息浜」というふたつの都市空間に分かれていた。この両者をつなぎするのが、12世紀初め以前に行われた埋立てで、現在の呉服町交差点付近で両砂丘はつなげられた。本調査地点は、この陸橋部分の東側で、「息浜」砂丘側の付け根付近に当たっている。陸橋の西側については、これまでに数次の調査例があり、小規模な埋立てを繰り返しながらも、砂丘間の低地は埋め尽くされず、これが完全に埋め立てられるのは近世初頭であるということが明らかになってきた。それに対し、陸橋の東側の低地部分については、近年調査例が増加しつつあるが、未だ景観復元の糸口すらつかめていない。今回の調査では旧地形の復元・陸橋東側の埋立て状況に関する手がかりを得ることが、課題としてあげられた。



Fig. 1 博多遺跡群位図 (1/25,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

発掘調査に先立つ協議の過程で、現地表から50cmまでの表土については、委託者側で掘削・搬出し、以下については調査者側で掘削・残土は申請地内で処理することとなっていた。試掘調査の結果では、最終的には現地表下400cm近くまで掘削が及ぶことが予想されたため、業者による掘削底から100～150cm程度の引きを取り、表土除去を行った。

表土除去は、現地表下180cmをめどに行い、調査区西側4分の3については、一気に300cmまで掘り下げた。これは、表土掘削の立ち会い時には、西側の大半の部分で、安定した造構面が確認できなかったことによる。

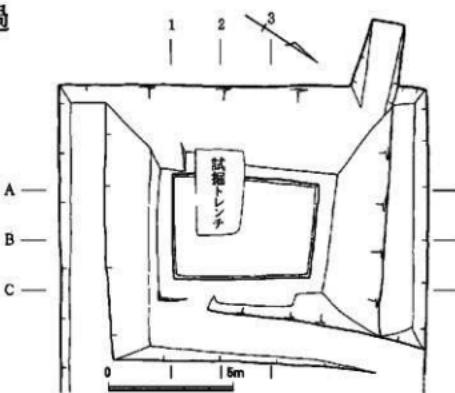


Fig. 2 調査区全体図 (1/200)

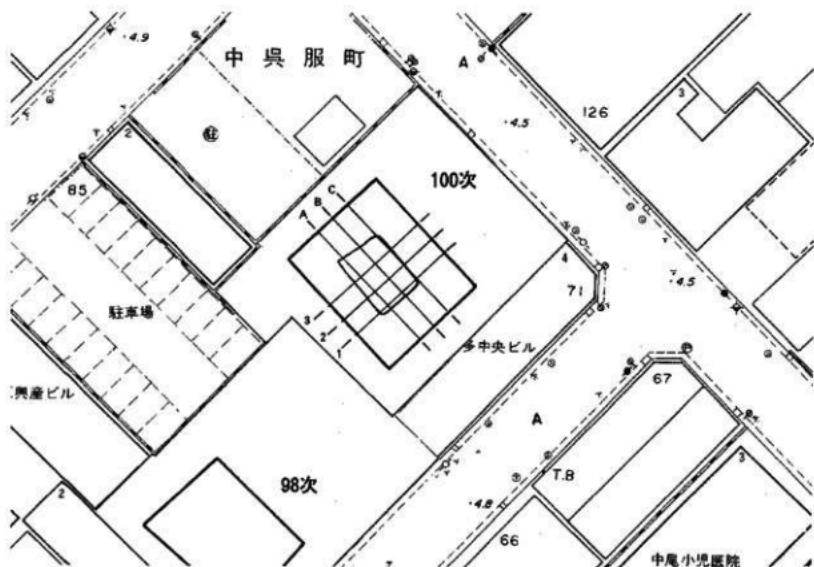


Fig. 3 第100次調査地点周辺測量図 (1/500)

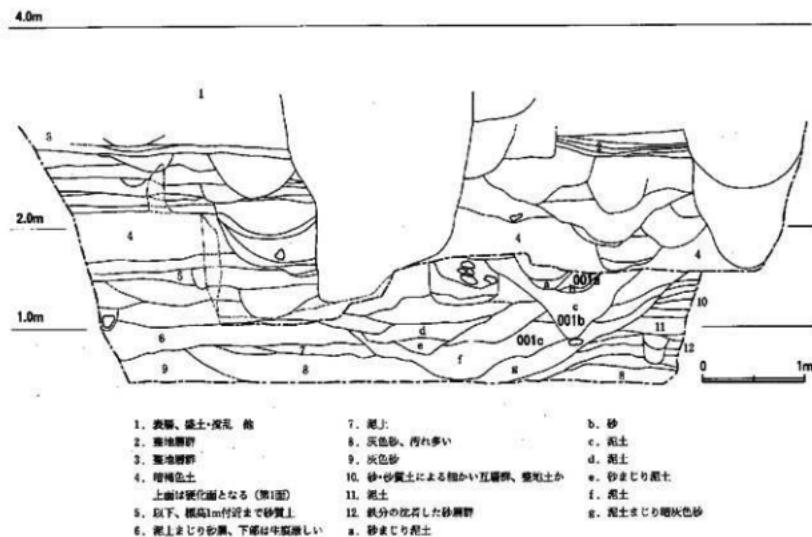


Fig. 4 南西壁土層実測図 (1/50)

その後、東側の一段高く残した部分から遺構調査を開始し、遺構検出・遺構精査・記録作成・人力掘削を繰り返し、3面の遺構検出面を設定、地形環境確認のための掘り下げ（調査時には第4面と仮称）を行った。遺構検出面の設定にあたっては、トレーンチを設けて土層を検討し、整地面や遺構の掘り込み面を手がかりとした。

なお、のり面を付けて掘削したため、最下面の面積は、22平方メートルを測るに過ぎない。検出した遺構の総数は27基、出土遺物は土器・陶磁器ーコンテナ17箱、木製品ー4箱、獸骨等ー2箱である。

2. 基本層序

調査区南西壁での土層実測図を、Fig.4に示す。

第1面の上、標高2.2~2.9mには整地層が厚く堆積し、数面の硬化面が確認できる。それそれが生活面と考えられるが、整地層下の暗灰色土層（7層）に肥前陶磁器の小片が含まれており、これらの生活面は近世以後のものと推定できる。

第1面以下には顕著な整地面はないが、実測図右下、標高0.5~1.5mの間には、細かい単位の互層が認められる。溝（001号遺構）の堆積を挟んで左側にはこれらの互層ではなく、砂質土層群が堆積している。この点の解釈については、第三章で考えてみたい。

最下層は、湧水以下にいたるまで、河川性の灰色砂で、砂丘砂は見られなかった。

3. 各遺構検出面の概要

(1) 第1面

標高2.1~2.2mで設定した遺構検出面である。調査区東側に一段高く残した部分で調査したため、面としての広がりは確認できていない。粘質土が硬化した面が、ほぼ全体に広がっている。

(2) 第2面

標高1.4m前後で設定した遺構検出面である。土層的には、壤土質土層群の最下面で、第2面以下では砂質土が堆積している。おおむね、001号遺構(溝)の掘り込み面と一致する。

(3) 第3面

標高1.1m前後で設定した遺構検出面である。砂質土層群の途中に設定したことになるが、土層実測図(Fig.4)で見るように、根石を沈めた柱穴が掘られている。本調査地点での、生活遺構の初源にあたる。

(4) 第3面以下

標高0.5mまで、確認のための掘削を行った。散漫に木杭が打ち込まれていた。土層実測図15層を堆積砂とする旧河川

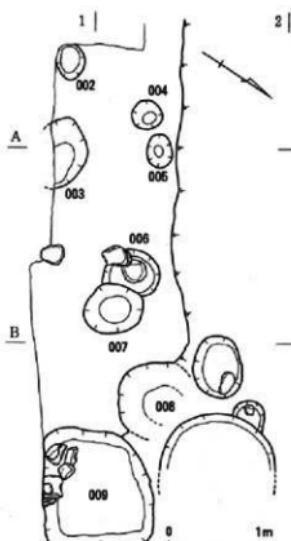


Fig. 5 1面遺構平面図 (1/50)



Ph. 1 各遺構面検出状況

に、打ち込まれたものと見ることも可能だろう。杭の密度、堆積土・砂に乱れが生じていないことから、埋立に伴う杭であるとは考えられない。その他には、顕著な遺構は存在せず、第3面以下には生活面は存在しないと判断することができよう。

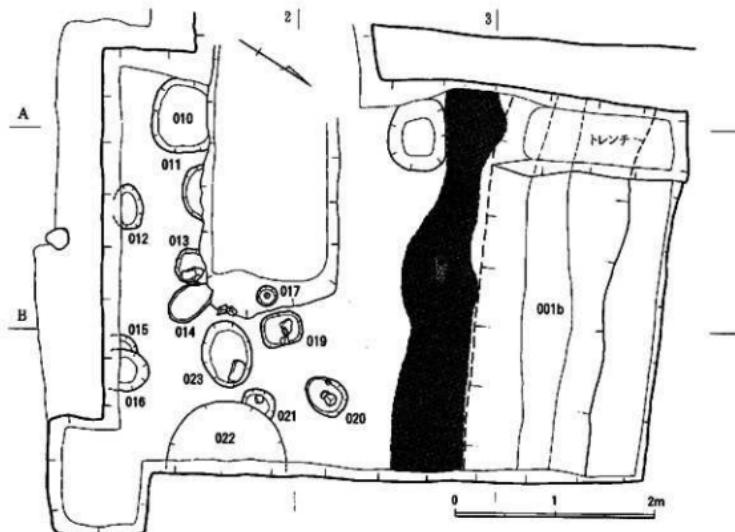


Fig. 6 2面遺構平面図 (1/50)

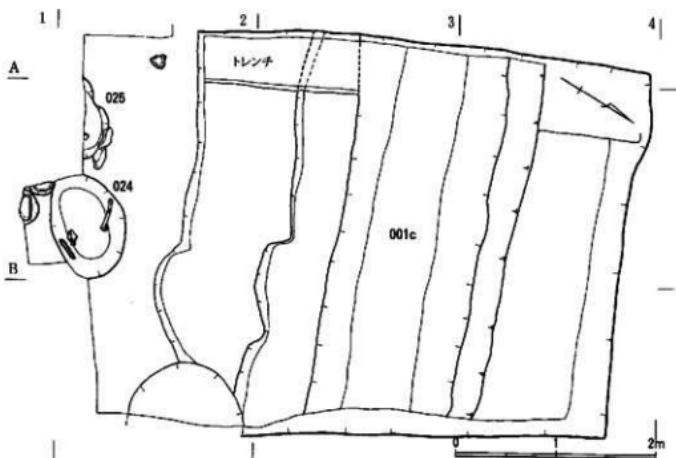


Fig. 7 3面遺構平面図 (1/50)

4. 遺構と遺物

今回の発掘調査では、柱穴・土坑・溝を検出することができたが、まとまった量の遺物が出土したのは、001号遺構（溝）のみである。以下の記述においては、001号遺構についてその概要を述べ、その他の遺構については、特徴的な出土遺物をまとめて、略述することにする。

（1）001号遺構

第2面で検出した溝である。掘り直しを重ね、次第に幅と深さを減じながらも存続している。

土層実測図（Fig.4）によりながらその変遷を追うと、最初に掘られた段階では、幅350cm、深さ130cm程の規模を有していた。次の段階では、幅は推定250cm、深さ90cm程となり、全体に西に移動している。なお、この段階では、最低一回の掘り直しがみられる。発掘調査時には、これ以前のふたつの段階を合わせて、001c溝として調査している。さらに埋没が進んだ時点で、幅160cm、深さ80cmのV字溝が、東に戻って掘られる。001b溝である。001a溝は、推定幅50cm、推定深さ40cm程度を測る。

そして、やや西にずれて同規模の小溝が掘られ、最後を迎える。

なお、001b溝の西岸には一担U字溝を掘った上で、石積が作られており、護岸と考えられる。

001b溝出土遺物を、Fig.8に示す。1・2は、土師器の皿・壺である。底部は、回転糸切りする。3・4は、白磁の口禿皿である。5は、青白磁の皿で、口縁を口禿に作る。6～9は、青磁である。10は、土師質土器の土鍋である。11～15は、中国陶器である。11は褐釉の瓶、12は黒釉の壺、13は黄釉鉄絵の盤、14は灰オリーブ色の釉をかけた壺である。15は、朝鮮王朝の象眼青磁碗である。印花文に白土と黒土が象眼されている。16は、土錐であろうか。土師質である。

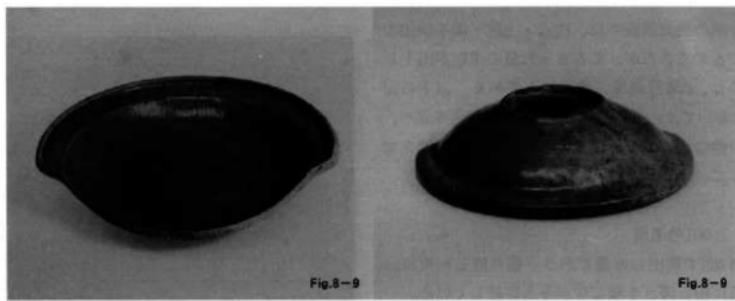
001c溝出土遺物を、Fig.9～11に示す。1～8は、土師器の皿・壺である。底部は、回転糸切りである。9は、須恵器系陶器の蓋である。黒褐色の、肌理はやや粗いが緻密な胎土で、器表にはテリがつく。10～12は、東播系須恵器の鉢である。13～27は、白磁である。13は壺の蓋、17～20・22・23は口禿の皿・碗である。26は、周囲を打ち欠いて、円盤状にする。28～51は、青磁である。28～39は同安窯系、40～51は龍泉窯系で、32・48の底部には、墨書が描かれている。52～70は陶器である。70の底部にも墨痕が見られるが、遺存部位が少なく、内容不明。71～74は、管状土錐である。75は、ふいご羽口で、一端には鉄滓がべったりと付着している。76～80は、石製品である。76・78は、滑石製の石錐である。79は、滑石の石鍋である。口径18cm、器高11.8cmと小型品である。80は、花崗岩の石玉である。



Ph. 2 001b号遺構（北より）



Ph. 3 001号遺構土層断面（北東より）



Ph. 4 001b号遺構出土遺物

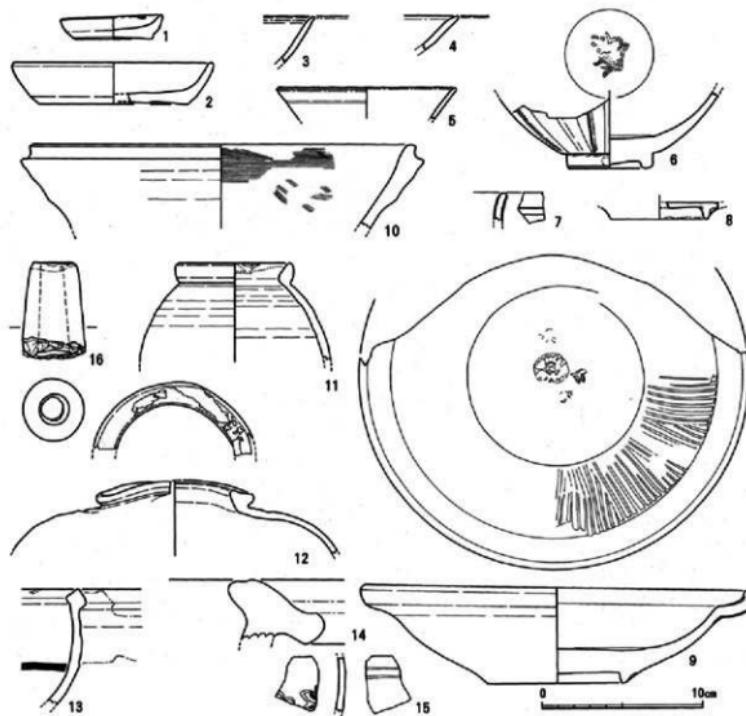


Fig. 8 001b号遺構出土遺物実測図 (1/3)

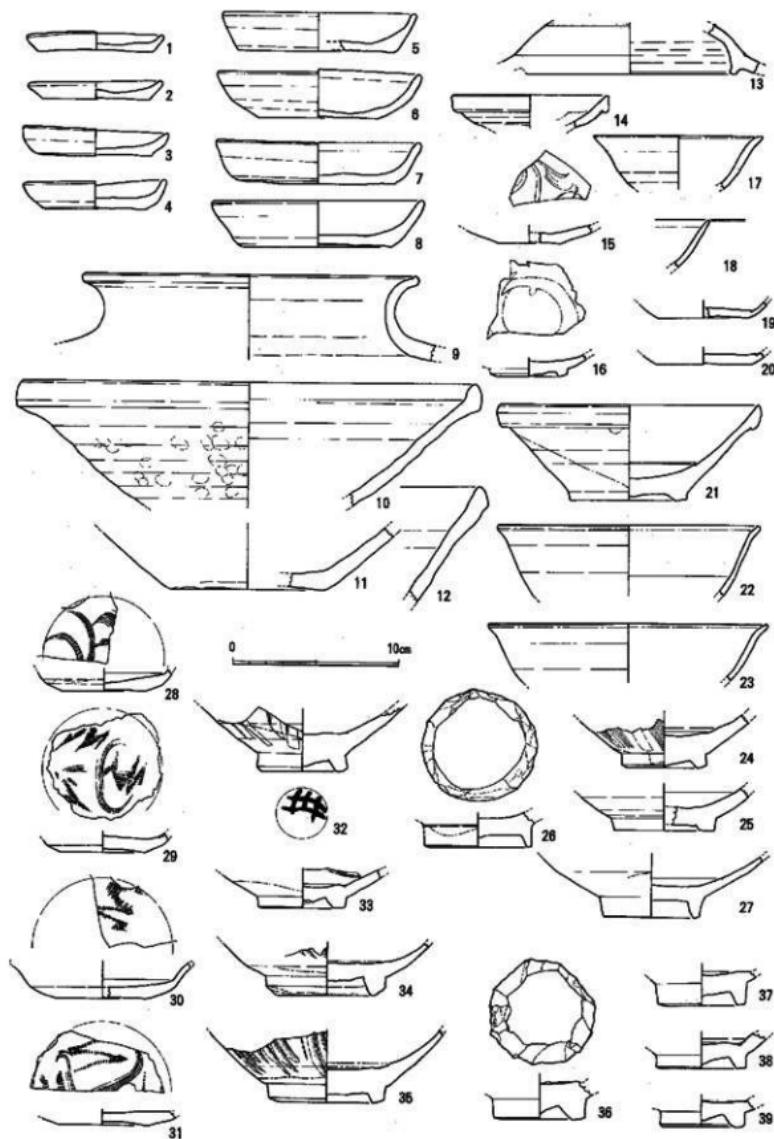


Fig. 9 001c号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

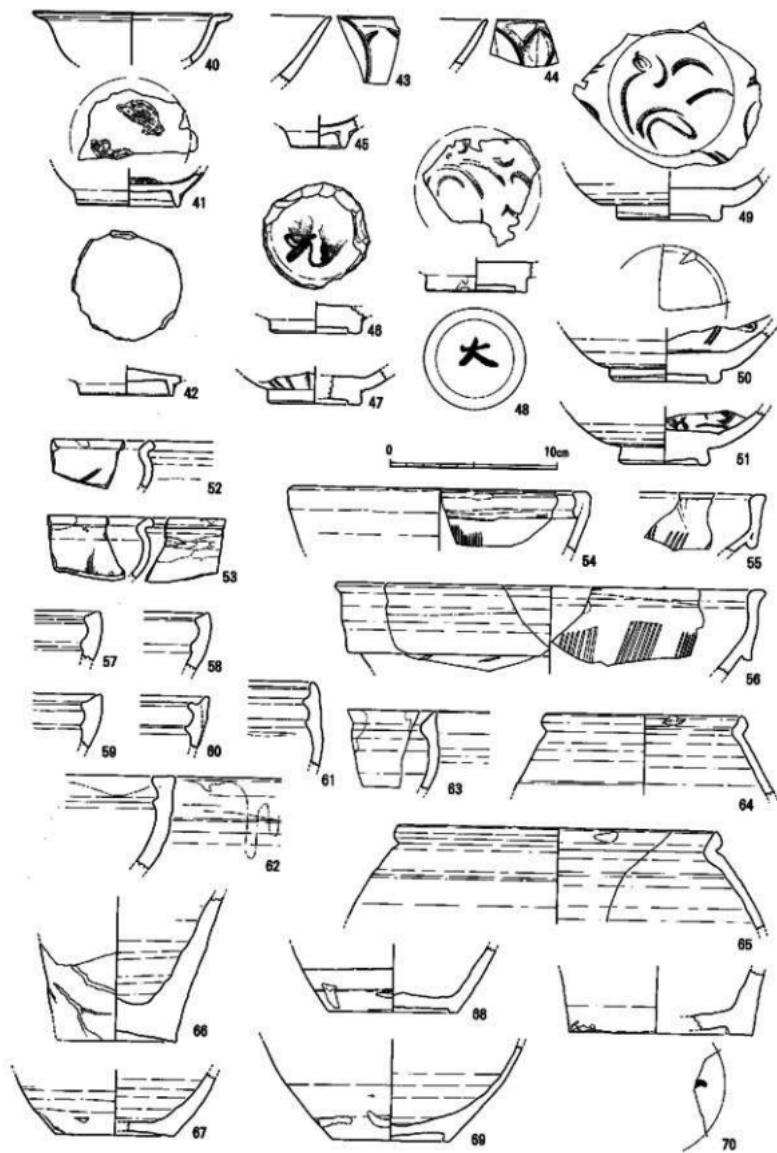


Fig.10 001c号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

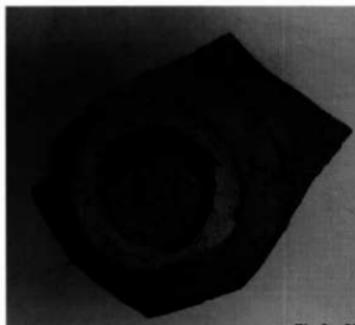


Fig.9-32

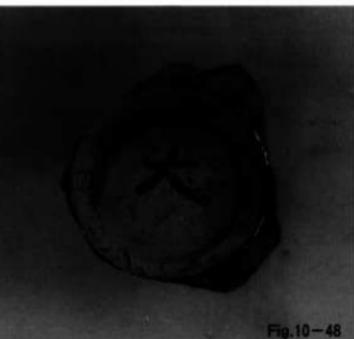


Fig.10-48

Ph. 5 001号遗構出土遺物

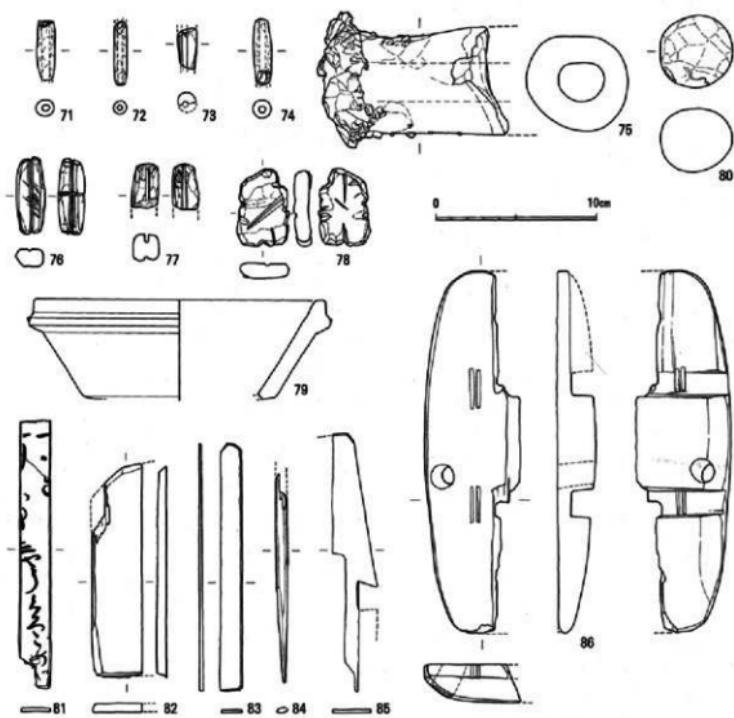


Fig.11 001c号遗構出土遺物実測図3 (1/3)

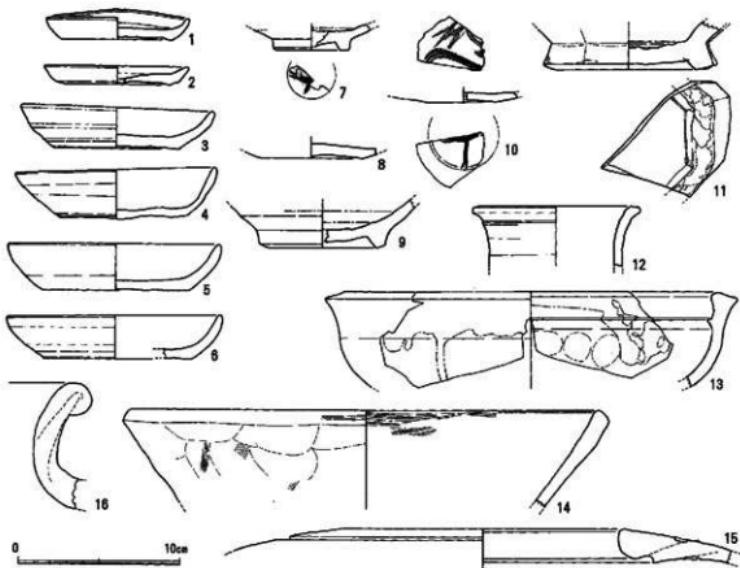


Fig.12 001号遺構出土遺物実測図 (1/3)

81~86は、木製品である。81は、板状木片で、片面には墨書きがみられる。箇条書きの二行分で、右行は「一 □□」(以下、欠)、「一 □□三やうくろこめ□」と読める。これについては、次章で触れる。82は、容器の底板である。実測図下端は一方から切れ目をいれ、割取っている。83は、薄板である。板草履の破片か。84は、箸である。85は、板草履の一部である。86は、下駄の台である。

大きく001号遺構出土として取り上げた遺物を、Fig.12に示す。1~6は土師器の皿・壺で、底部を回転糸切りする。7~9は白磁、10・11は青磁、12・13・15は陶器である。16は備前焼の壺で、口縁部を玉縁に作る。14は、瓦質土器のこね鉢である。

001c溝の溝底から出土したのは、Fig.9-15・16・21・34・38で、溝が最初に掘られた時期を示すとすれば、12世紀後半に作られたこととなる。001c溝の下限は、14世紀前半頃であろう。001b溝の遺物は、14世紀後半あたりを示しているようで、おおむね14世紀末から15世紀初め頃が001号遺構の終焉であろう。

(2) その他の出土遺物

001号遺構以外から出土した遺物の内、特筆すべきものをFig.13・14に示し、略述する。

1~3は、楕葉型瓦器碗である。1は口縁内面に沈線を持たず、体部内面は密に平行窪磨き、外面は疎らに窪磨きを加える。2は、口縁内面に沈線を巡らす。体部は内外面ともに密に窪磨きする。3も、口縁内面の沈線を持たない。器壁は均一に薄手で、口縁端部がやや外反する。外面の窪磨きは、疎らである。4は、瀬戸窯の天目茶碗である。大窯8期あたりの製品であろう。5は、瓦質土器のすり鉢

である。口縁部を内側に折り返しており、周防型とされる特徴を持つ。6は、龍泉窯系青磁の皿である。外面は沈線で蓮弁を、内面には花文を描く。7~9は、墨書きである。7は花押、8は「十」、9は「処」(そ)、10は花押あるいは文字か。11は、平瓦である。瓦質に焼成されている。12~15は、

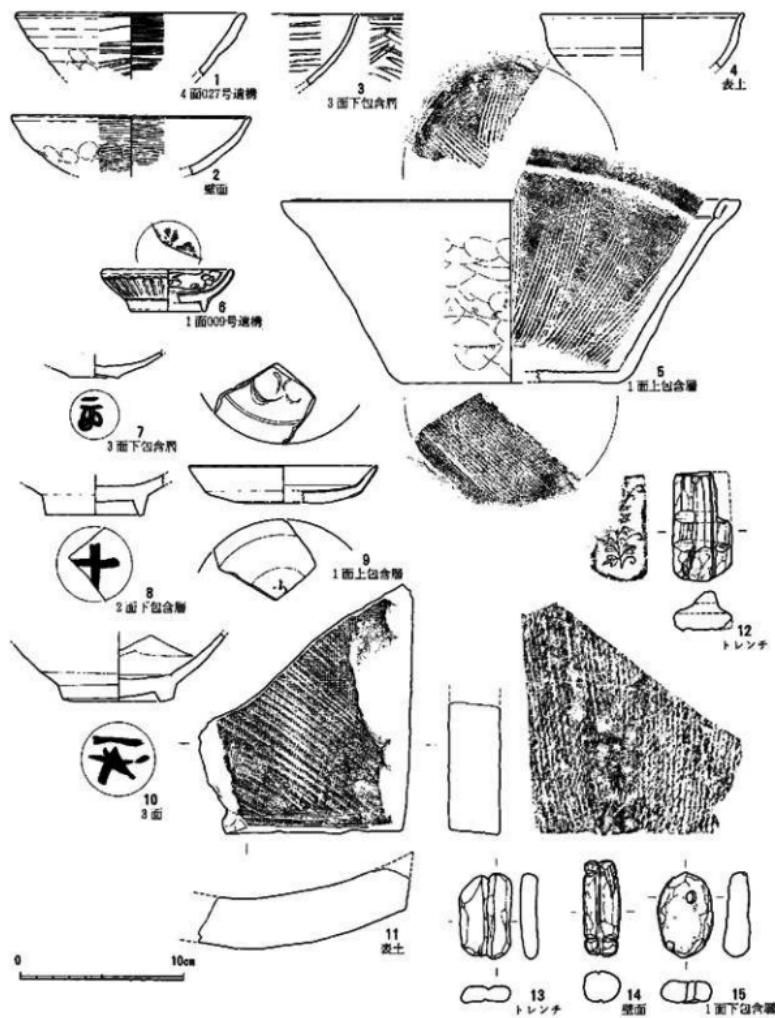
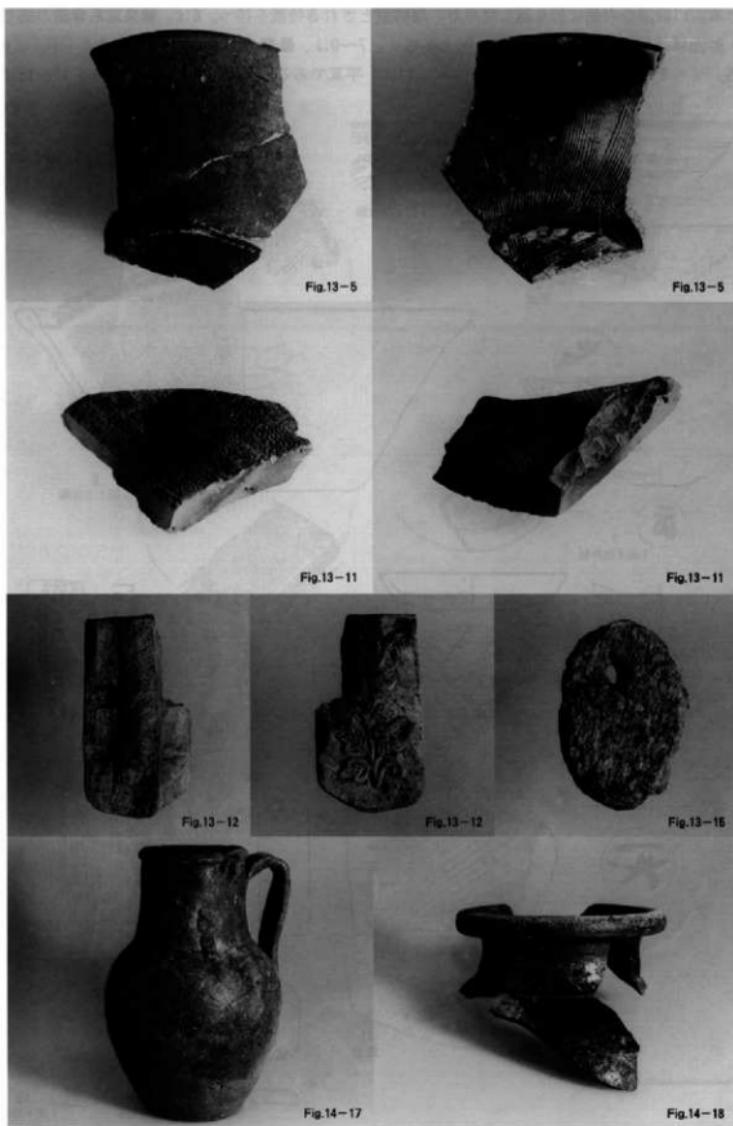
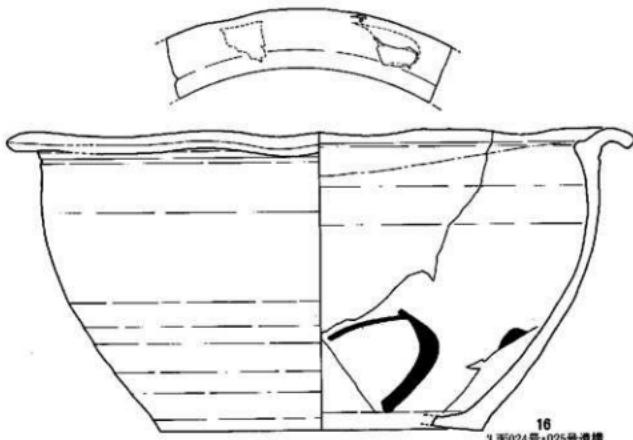


Fig.13 その他の出土遺物実測図 1 (1/3)

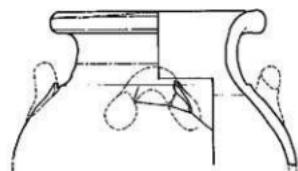


Ph. 6 その他出土遺物



3面024号・025号遺構

0 10cm



1面008・009号遺構
1面上包含層

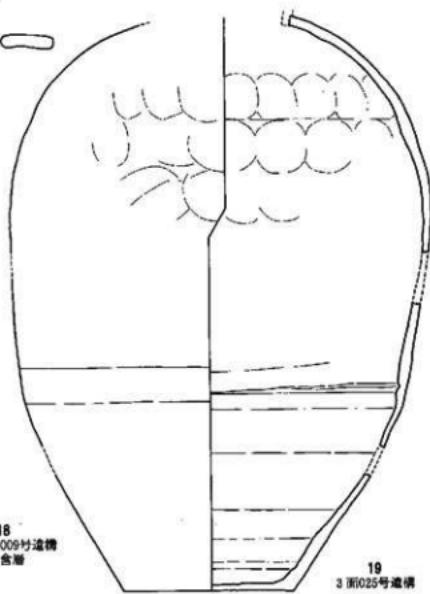


Fig.14 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)

石製品である。12は、滑石のスタンプである。13・14は、滑石の石錠破片を転用した石錠である。15は、軽石の浮子であろう。16～18は、中国陶器である。16は、黄釉鉄絵の鉢で、口縁の上面には目痕が並ぶ。17は褐釉陶器の水注、18は無釉陶器の壺である。19は、タイ陶器の壺である。黒釉を施す。

この他、今回の発掘調査では5点の銅錢が出土した。「開元通宝」1点、「寛永通宝」1点、解説不能3点である。開元通宝は真書体で、背面の上位置に、いわゆる「月」が認められる。第1面の007号遺構から、解説不能銭1点が出土した以外は、すべて包含層からの出土である。

第三章　まとめ

以上、まことに簡単ではあるが、博多遺跡群第100次調査の概要を述べてきた。以下に簡単なまとめを試み、発掘調査の成果としたい。

本調査地点での最も遡る遺構は、12世紀後半に属する可能性を持つ001号溝である。一方、最下遺構検査面の基盤は、12世紀後半の遺物を含む砂層であり、基盤砂層の堆積後間もなくして生活が開始されたことがうかがわれる。その後あまり遺構密度を増すことなく、近世にいたる。近世においては、整地による硬化面が重層しており、安定した生活面が営まれていたと考えられる。

さて、次に遺構が営まれる以前の地形環境について、考察したい。今回の発掘調査では、砂丘は検出されなかった。第一章第3節でも述べたように、本調査地点は博多浜と息浜というふたつの砂丘間に位置しており、結論を言えば、砂丘間に流れた河川の河口性の堆積砂が基盤であった。ただ、注意しなくてはならないのは、001号遺構の西側には細かい単位の整地がみられたということである。ひとつつの可能性として、001号遺構を境にして西側すなわち息浜側には埋立整地が、東側は旧河道の自然堆積が見られたものと考えたい。ただし、東側も生活が営まれなかつた訳ではなく、第3面で遺構がみられたように、一時的にせよ建物を営むことが可能な程度には、地盤が形成されつつあったといえる。むしろ、自然状態での地盤の形成を待てなかつた結果、整地が行われたものと思われる。なお、第98次調査の結果を見れば、この東側部分が都市化するのは12世紀後半から13世紀前半であり、都市下の速度が急激であったことが想像される。

さて、今回の発掘調査では、001号遺構から木簡が一点出土している(Fig.11-81)。これについては『木簡研究』第20号、1998年に紹介したことがあり、内容的には繰り返しになるが、あらためて触れておく。墨書きは、左右及び下端を欠失した木片に書かれたもので、表面に刃物傷が残ることから、折敷断片と思われるがはっきりとはしない。墨痕は遺存部分で二行確認でき、

「- □□

一 □□三やうくろこめ□」

と読める。「三やうくろこめ」は「算用玄米」であろう。墨痕が残るので、以下に文字が続くことは確かだが、折損により不明である。時期は、14世紀前半頃に属する。

なお、木簡の判読に際しては、九州大学文学部坂上康俊氏・同佐伯弘次氏のご教示をいたいた。記して謝する次第である。

第100次調査は、限られた面積での発掘調査であり、また博多遺跡群としては希なほど遺構・遺物が少なかった。そのこと自体がこの地点の特性なのであろうが、十分に検討できなかつた。周辺の事例の増加を待って、再論を期することとする。

博多 81

—博多遺跡群第100次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第707集

2002(平成14年)年 3月29日 発行

発 行 福岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 国 崎 美 蜂 堂
福岡市東区箱崎1丁目20-5

